

責任編集・現代語訳 松田道雄、貝原益軒著「貝原益軒、楽訓」日本の名著 1973年11月10日刊
を読む

巻上

—総論—

1. 人の道

- (1) 天地の恵みをうけて生きとし生ける万物のなかで人ほど尊いものはない。
- (2) なぜなら人は万物の^{れい}霊だからだ。
- (3) だから、かく人と生まれてきたことは、またと得られぬ幸福である。
- (4) それなのに、われわれは愚かで人の道を知らない。
- (5) 天地から生まれつきもらっている人の心を失い、人の行くべき道を行かず、行くべきでない道に迷い、朝夕に心を苦しめている。
- (6) そのうえ私心のみふかく、人に情をかけず、思慮あさく人の^{うれ}憂いを知らない。
- (7) いたって近い父母に仕えてさえ、その心になかない。
- (8) およそ人間関係において道を失い、人と生まれた尊いからだをむだにして、鳥獸と同じに生き、草木とともにくちはてるのは、本意ないことである。
- (9) 顔之推^{がんしすい}(南北朝時代、北齊の儒者)が「人身は得がたし。空しく過ごすことなかれ」といったのを心にとどめたい。
- (10) ゆえに人は幼児から聖人の道を学び、わが心に天地より生まれつきもらった仁を行なって、みずからも楽しみ、人にも仁をほどこして楽しませるがいい。
- (11) 仁とは何か。
- (12) あわれみ^{れい}の心を本として、行ない出したいろいろの善をすべて仁という。
- (13) 仁とは善の総称である。
- (14) 仁を行なうのは、天地の御心にしたがうことである。
- (15) これが、昔の聖人の教え給う人の道である。
- (16) この道にしたがって、みずから楽しみ、人を楽しませて人の道を行なうのが、人と生まれたかいというもので、それができれば顔之推のいったむなしく過ごすという悔いもないだろう。

2. 楽しみとは

- (1) およそ人の心には、天地よりもらった至高の和の元気がある。
- (2) これが人の生きていく理である。草木の成長してやまぬように、つねにわが心のうちには天機が生きてやわらぎよろこぶ勢力の絶えないものがある。
- (3) これを名づけて楽しみという。
- (4) これは人の心の生理であるから、同時に仁の理である。
- (5) 賢者だけにこの楽しみがあるのでない。すべての人に楽しみがある。
- (6) しかし学ばなければこの楽しみのあるのを知らない。
- (7) 『易』に「百姓^{ひやくせい}(人民)日々に用いて知らず」とあるのと同じだ。
- (8) また私欲にわずらわされると、この楽しみを失う。ひとり賢者はこの楽しみを知り、私欲にわずらわされず、楽しみを失わない。

- (9)ただ人間だけにこの楽しみがあるのではない。
- (10)鳥獸草木にもこの楽しみがある。
- (11)草木の生い繁り、花咲き、みのり、鳥さえずり、獸のたわむれあそび、鳶とびのとんで天にいたり、魚の淵ふちにおどるのも、みなこの楽しみを得ているのである。
- (12)しかし、人間でも多くがこの楽しみを知らずに失っている。
- (13)いわんや鳥獸はいうに及ばない。

3. 楽しみは内にあり

- (1)人の心には本来この楽しみがある。
- (2)私欲の行ないさえなければ、いつでも、どこでも楽しいはずだ。
- (3)これが本性から流れ出た楽しみである。外に求めるのではない。
- (4)わが耳・目・口・鼻・形の五官は外物に接して色を見、声を聞き、物を食い、香をかぎ、からだを動かす。
- (5)この五つのわざを静かに欲少なく暮らせば、行きもかえりも楽しくないものはない。
- (6)これは外物を楽しみの本としないからである。
- (7)また外物にふれて、その歓喜の力によって楽しみがはじめて出てくるのでもない。
- (8)本来人の心に生まれつきの楽しみがあるゆえ、外物にふれて、その助けを得て内にある楽しみがさかんになったのである。
- (9)たとえば人に生まれつきの元気がある。
- (10)これが生命の本である。
- (11)しかし、飲食・衣服などの外からの養いがないと、飢え凍えて元気を保てない。
- (12)外物の養いで内の楽しみを助けるのは、外にある飲食・衣服の養いで、内にある元気を助けるようなものである。
- (13)また心の内にこの楽しみがあると、飲食などの外の養いもみな楽しみ助けになる。
- (14)そればかりか、朝夕の目のまえに満ちた天地の大なるしわざ、日月の輝く光、春夏秋冬の回帰する整合、おりおりの景色の美しさ、雲烟うんえんのたなびく朝夕の変化、山のたたずまい、川の流れ、風のそよぎ、雨露のうるおい、雪の清冽せいれつ、花のよそおい、わか草のさかえ、木々のしげり、鳥獸虫魚の生きるさままで、すべて万物の生きる心のたえてやまぬのを賞し愛めでれば、かぎりない楽しみである。
- (15)これに向かうと心ひらき、情なさけきよく、道心を感じ、よろこびおこり、物を惜しむ心を洗い去る。
- (16)これを天機に触発するという。
- (17)触発とは外物にふれて善心をおこすのをいう。
- (18)これは外物の養いをかりて内の楽しみを助けるのである。

4. 学ばぬ人は

- (1)学ばぬ人は内にある楽しみを知らぬ。
- (2)また外にある楽しみをむだにする。
- (3)内外二つとも失ってしまう。

5. 楽の字

- (1)聖人はなにかにつけて楽の字を説き給うた。

- (2)なぜそうされたのかを思い、楽しみの切実なことを知らねばならぬ。
- (3)礼経(ここでは『礼記』)にも「心中しばしも和やわらがず楽しまざれば、いやしき心生ず」といっている。
- (4)この楽しみを失わなければ、きたない心はおこらない。
- (5)だから賢愚を問わずこの楽しみを求めよう。
- (6)ただ賢者にだけ楽しみがあってよいのではない。
- (7)誰でも楽しみが内にあると、徳が身をうるおし、心はひろく体はゆたかになる。
- (8)ちょうど富が家をうるおすようなものである。

6. 和楽をむねとして

- (1)天地の恵みをうけて人となり、天地の心をうけて心とした人間であるから、天地の心にしたがって、わが仁心を保ち、つねに楽しみ、温和・慈愛を心がけ、情ふかく、人をあわれみ、人に恵み、善を行なうのを楽しみにしなければならぬ。
- (2)人の悪をさとそうと怒り罵ののしるのは、やむを得ないばあいである。
- (3)ふだんは和楽をむねとして、気を養うべきである。
- (4)しかし和ばかりで礼がないと一方にかたよって、乱れて楽しみを失う。

7. 人とともに楽しむ

- (1)人の憂苦を思いやって、人の妨げとなることをしてはいけない。
- (2)つねに心にあわれみがあって、人を救い恵み、かりにも人を妨げ苦しめてはならぬ。
- (3)われひとり楽しんで人を苦しめるのは天のにくむところで、自粛しなければならぬ。
- (4)人とともに楽しむのは天のよろこぶ理であって、真の楽しみである。

8. 聖人の道

- (1)それだから天の道にしたがい、人の道を行なって、みずから楽しみ、人を楽しませるために、つねに善を行ない悪を遠ざけるようにしなければならぬ。
- (2)このようにするには、特別の務めはない、ただ聖人の道を学んでその理を知ればよい。

9. 和気を保って

- (1)人をうらみ、怒り、みずからをほこり、人をそしり、人の小さな過失をせめ、人の言ことばをとがめ、無礼を怒るのは器量が小さいのである。
- (2)これはみな楽しみを失っているからそういうことをするのである。
- (3)怒りと欲をこらえ、心をひろくして人を責めとがめないのは器量が大きいのである。
- (4)これが和気をたもって楽しみを失わぬ道である。

10. 人の愚かなのを

- (1)世の人のすることに不都合の多いのは、うき世の習いであるから、どうにも仕方がない。
- (2)教えてもしたがわぬのは愚人である。
- (3)聖人でも力が及ばない。
- (4)人の愚かなのを怒って自分の心をなやますのはよくない。
- (5)人が悪く生まれついたのは、その人の不幸である。
- (6)あわれんでやらねばならぬ。こだわってうらみとがめ、みずからを苦しめてはならぬ。

(7)人が悪いからといって、自分の心の楽しみを失うのは愚かである。

11. 小人には

小人が思いもかけぬ悪事をしたり、非人情で道理にはずれた横着ものぐたりするもの、昔からよくある世の習いであるから、ふつうの人間はそういうものだろうと思いやって、うらみ怒ってはならぬ。

12. 不肖の子

- (1) 堯・舜ぎょう しゆんの聖人も、わが子が親に似ないのをどうにもできない。
- (2) わが子弟・親戚などが、教えてもしたがわなかったら、責めとがめて和を失ってはならぬ。
- (3) 人が生まれつき親に似ないのも、自分がそういう人物に会って不幸なもの、みな天命であるから、みずから苦しみ人を怒って楽しみを失ってはならぬ。

13. 心ここにあらざれば

- (1) 心がここになかったら見ても見えない。
- (2) 目のまえに、楽しむべき情景が満ち満ちていてもわからない。
- (3) 春秋にあっても感じない。
- (4) 月花をみても感動がない。
- (5) 聖賢の書にむかっても読む気がおこらない。
- (6) ただ私欲にふけて身みの苦しめ、不仁で人を苦しめ、道にそむいていやしいことばかり行なって、短い人生をつまらなく暮らすのは情しいことだ。

14. 心にある楽しみ

明晰めいせきな心こころをもち世の理をよく思い知り、ものに感動できる人は、自分の心にある楽しみを知って本とし、おりおりの四季のなかに、天地陰陽の道の行なわれるのを愛し、天地間の万事を見聞きするたびに、耳目をよろこばせ、心を快くするから、その楽しみは無限で、手の舞い足の踏むところを知らぬだろう。

15. 道は内に

- (1) 世の人は貧しいときは、悲しみ苦しめ、富貴をうらやんで楽しみがなく、富貴のときはおごり怠って欲をほしいままにし、金をついやして楽しみを求めるが、欲のために身をそこなって、みずから苦しめ、人を苦しませる。
- (2) すべて富貴も貧賤も、その願いは外にある。内に道を得なかったなら苦しめばかりで楽しみがない。

16. 内の楽しみを本として

- (1) 内の楽しみを本とし、耳目を外そとの楽しみを得る仲介として、欲になやまされずに、天地万物の光景の美に感動すれば、その楽しみは無限である。)この楽しみは朝夕つねに眼前に満ち満ちてあまりがある。
- (2) これを楽しむ人は、山水月花の主人であるから、人に乞い求める必要がない。
- (3) 金で買うのでないから一銭もいらぬ。
- (4) 心にまかせ好きなだけ使ってもなくなるらない。

- (5) つねにわがものとしてひとり占めしても誰もおこらない。
- (6) なぜなら山水風月の美景はもともと定まった主人がないからである。
- (7) このように天地間の無限の楽しみを知って楽しむ人は、富貴の楽しみを見せびらかされてもうらやまない。
- (8) その楽しみが富貴にまさるからである。
- (9) この楽しみを知らぬ人は、楽しむべきことが目のまえにつねに満ち満ちているのに、その楽しみを知らないから楽しめない。
- (10) 世俗の楽しみは、その楽しみがまだ終わらないのに、早くもわが身の苦しみとなる。
- (11) たとえば味のよいものをむさぼって飲み食いすると、はじめは快くてもやがて病気がおこって身の苦しみとなるようなものだ。
- (12) およそ世俗の楽しみは心を迷わし、身をそこない、人を苦しませる。
- (13) 君子の楽しみは迷いなく心を養う。外物をもっていうなら、月花を愛し、山水を見、風を詩にうたい、鳥をうらやむようなことは、その楽しみがあわいから、一日中楽しんで身にもさわらず、人のとがめにも神の怒りにもあわない。
- (14) この楽しみは貧賤であっても得やすく、のちの禍がない。
- (15) 富貴の人は、驕^{きょうまん}慢^{けんたい}と倦怠にすさんでこの楽しみを知らぬ。
- (16) 貧賤の人は、この二つの損失がない。
- (17) 志さえあれば、この楽しみを得られる。

17. 足ることを知る

- (1) 君子は足ることを知って貧^{むさぼ}らぬゆえ、身は貧しくても心は富んでいる。
- (2) 古い言葉に「足る事を知る者は心富めり」とあるとおりだ。
- (3) 小人は身が富んでも心は貧しい。貧りが多く飽くことを知らぬからである。
- (4) それゆえ、ただこの楽しみを知って貧賤を気にとめず、富貴を願わぬ計りごとをすべきである。
- (5) 老いては、いよいよ貧らず、足ることを知って貧賤を甘受するがよい。

18. 小人の楽しみ

- (1) 君子・小人ともに楽しみを好むのは人情である。
- (2) しかし君子と小人の楽しみとするところは同じでない。
- (3) 『礼記』に「君子は道にしたがうことを楽しみ、小人は欲にしたがうことを楽しむ。道を以て欲を制すれば楽しんで乱れず、欲を以て道を忘るれば乱れて楽しまず」といっている。
- (4) だから小人の楽しみは真の楽しみではない。
- (5) はてはかならず苦しみとなる。

19. 栄枯盛衰

- (1) 天地は風雷の変があっても和気を失わない。
- (2) 人も苦難があっても和樂を失ってはならない。
- (3) 人もし地位が下落しても、時世がすたれても天命を安んじてうけいれ、心を寛大にするがよい。
- (4) 土御門院の御歌に「うき世にはかかれとてこそ生れけめ^{ことわり}理^{つちみかど}しらぬわがなみだかな」というのがあり、また古歌に「うきことは世をふるほどのならひとぞおもひもしらで何なげくらん」

というのがあり、また「ならひぞと思ひなしてやなくさまん我身ひとつのうき世ならねば」と詠んだようなものである。

- (5)うき世に住めば、心になわぬことが多い。
- (6)これが世のならいである。
- (7)どんな大富豪で幸福な人も、病気がなく、長命し、親戚に心配がなく、五福(長寿・富・健康・徳・天命)備わり、思いどおりになる人はまれである。
- (8)世はかくの如くであることを知らずに栄枯盛衰に心をいためるのは愚かである。

20. 身に即して楽しむ

- (1)もしこの理を知っていたら、身に即して楽しみ、外を願ってはならぬ。
- (2)貧賤であっても苦難にあっても、どんな時、どんな所でも楽しみがないということはない。
- (3)坐れば坐る楽しみがあり、立てば立つ楽しみがある。
- (4)行くにも臥すにも、飲食にも、見るにも、聞くにも、ものいうにも、楽しみのないということはない。
- (5)楽しみがもともと心に生まれつきにあり、からだに備わっているものだからである。
- (6)だが、この楽しみを知っていて楽しむ人は少ない。
- (7)理に暗ければ楽しみを知らないし、欲がふかければ楽しみを失う。

21. 時を惜しむ

- (1)人にもし余暇があったら、心をおだやかに静かにし、日をながくして、あわててはいけない。
- (2)とくに老いては残る年がようやく少なく、時節の過ぎることもことさら早いから、時刻を惜しんで、一日を十日と思ひ、一月を一年と思ひ、一年を十年と思ひて楽しむがよい。楽しまずむだに月日を暮らしてあとで悔いてはならぬ。

22. 光陰は矢の如く

- (1)春から年の暮れまで、射るように速く思われ、時日の早く過ぎていくのをとめられないので、いみじくも年(疾し)と名づけ、また時(疾き)といったのであろう。
- (2)だから「光陰^や箭の如く、時節流るるが如し」といったのも、根のないことではない。
- (3)老年にむかうと、なおさら年月が早く過ぎ、あたかもとぶようである。
- (4)あとをふりかえてみると、五十歳をこしたのもついでこの間のことのように思える。
- (5)たとえ五十歳からさきに五十年を生きて百歳になったとしても、なお行くさきの月日はいよいよ早く、間もなく尽きるであろうことが思いやられる。
- (6)いくらもなく残っている年を、楽しむ態度こそ、すぐにも願わしい。
- (7)憂い苦しんで、むだに過ごすのは愚かなことである。
- (8)年々歳々花は似ているが、人は同じでない。
- (9)老いがかさなると、一年のうちにもだんだん衰えて、今は昔に及ばず、後日は今日に及ばぬのをわきまえて、かねてから悔いのないように、時を惜しんで一日もむだに過ごしてはいけない。
- (10)今日が暮れても明日があるのをあてにしてはならぬ。
- (11)今日の日のうちを日々に惜しむべきである。

23. 知足の理

- (1) わが身の足ることを知って分(天が自分にさだめた領域)に安んずる人はまれである。
- (2) これは分の外を願うので楽しみを失うのである。
- (3) 知足の理をよく考えてつねに忘れてはならない。
- (4) 足ることを知っていれば貧賤にあっても楽しい。
- (5) 足ることを知らないと、富貴をきわめても、なお飽きたらず楽しめない。
- (6) こういう富貴は、貧賤な人の足るを知っているのにはるかにおとる。
- (7) 富貴貧賤は賢愚によらず、ただ生まれついた分がある。
- (8) 古人の詩に「耕牛宿食(たべのこした食)なし、蔵鼠余糧あり」とあるようなものだ。
- (9) 賢者でも貧しく、不肖の子で富んでいる人も多い。
- (10) これは生まれついた分である。
- (11) 分に安んじて、分外をうらやんではならぬ。
- (12) 分外を願う人は楽しみがなく、憂いが多い。禍はまたここからおこる。
- (13) 愚かというべきだ。
- (14) 世の中には自分ほども幸福でない人が多い。
- (15) 自分より下の人を見て足ることを知り、分に安んじ、外を願わなければ、憂いなく楽しみ多く、禍がない。
- (16) また極貧の人も、人おのおの生まれついた分があることを知って、分に安んじて、天をうらんだり人をとがめたりしてはならない。

24. 余財あらば

- (1) 世の中に同じく人と生まれて、飢え凍える人も多い。その不幸をあわれむべきである。
- (2) 自分に余財があったら、こういう貧しい人にほどこしをして救い、自分も楽しみ、人も楽しませるがよい。
- (3) 人間の現世の楽しみは、みずから善を楽しみ、人を救って善をするに越えた楽しみはない、心おごって役に立たぬことに財を多く使うのは、浮気のなすわざで、はなはだ惜しむべきことだ。
- (4) よく考えて、それは楽しみでないことを知らねばならぬ。
- (5) 富んだ人がいい気になって、一日一事についやして財を使えば、千万人の飢えを助けてもなお余りがある。
- (6) だから百人の飢えを救うのには、財を多く使わないでもよく、その益は大きい。
- (7) だから大富人でなくても仁心さえあれば、眼前の人の飢え凍えるのを救うほどの恵みは行ないやすかろう。
- (8) まして富貴高禄の人が多くの人の飢えを助けるのは、いとやすいことである。
- (9) それができないとすれば、志のないことを恥じるべきで、財の足りぬのにことよせてはならぬ。

25. 貧しくとも

- (1) 富貴であると、驕慢と怠惰になりやすくこの楽しみを得がたい。
- (2) 貧賤の人には驕慢と怠惰が少ないから、教えやすい。
- (3) 富貴の人は世のうつろいやすいことに目うつりして、書を読んで道を楽しむことを知らない。
- (4) だから富貴なのはかえって不幸だといえる。

- (5)この大きな楽しみを得がたいからである。
- (6)古い言葉に「貧しきは富めるにまされり」とある。
- (7)また「読書は貧者の楽しみ」というのもうまくいったものだ。
- (8)私などは愚かで貧しいから、ちりあくたの数にも入らぬ身であるが、書を読み道を尊ぶ楽しみは、どんな富貴にもかえがたい。

26. かぎりある命

- (1)人の命はかぎりがある。
- (2)のばして長くするわけにはいかぬ。
- (3)かぎりある命のうちの時間を惜しみ楽しんで月日を送るがよい。
- (4)少しの間も無益のことをし、誤ったことを行ない、楽しまずにむだに過ごしてはならぬ。
- (5)まして憂い、苦しみ、怒り、悲しんで楽しみを失うのは愚かである。
- (6)することもなく、楽しみもなく月日をむなしく過ごすのだったら、千年生きても甲斐がないだろう。

27. 短い人生

- (1)幼から壮となり、老にいたり、衰えて死にいたるまで、百年の歳月も、いくらでもない。
- (2)人の世に生きているのは、かりに宿泊している旅行者のようなものだ。
- (3)東坡(蘇軾、宋の詩人)の詩に「一年は一夢の如し。百歳は真に過客たり」とあるのももっともである。
- (4)こんなに短い人生であるから無用のことをして時日を失ったり、ぼんやりとすることなしに終ってしまうのを惜しむべきである。
- (5)つねに時日を惜しみ、役にたつことをし、善をすることを楽しんで過ごすのは、この世に生きるかいがあるといえよう。

28. 草木までも

心にあわれみぶかく、善を好んで心がおだやかであると、物に慈愛を感じ、人倫に親しむのはもちろんだが、草木まで自分とへだてなくかわいらしくなる心地がする。

29. 従容せまらず

- (1)つねの氣象は、「従容不迫」の四字を守るべきである。従容とは、おちついて静かなのをいう。
- (2)せいていそがしい時も、心をおだやかに気を和らげ、楽しみを失ってはならぬ。仕事が多くても心は静かにする。
- (3)静かでないと間違いが多い。
- (4)人が自分に対してどんなに無情で無礼であっても、怒って言葉をはげしくし、目をいからせ、色をなし、楽しみを失ってはならぬ。
- (5)つねにその氣象は従容として迫らずであるべきだ。

30. 心に閑を

- (1)白楽天(唐の詩人)の詩に「自^{はくらくてん}ら年を延ぶるの術あり。心閑なれば歳月長し」というのがある。

- (2)また「閑中日月長し」というのもある。
- (3)東坡の詩に「無事にしてここに静座すれば一日これ兩日、人若し活^もく^いること七十ならばすなわちこれ百四十」といったのも、心が静かだと月日が長いことをいったのである。
- (4)およそ閑のなかには楽しみがいつもある。
- (5)余暇のない人もおりおりに閑を求めて、心を養うがよい。
- (6)心が閑でないと楽しみが得がたい。しかし閑にじっとしているばかりで、動作をきらうのは正道でない。

31. 貧居の楽しみ

- (1)心が安く身が閑で、独り座っているのも、また貧居の楽しみである。
- (2)世俗の宴会を好み、さわがしい友の多いのよりよろしい。
- (3)学を好まない人が訪問してこないのは、かえってありがたい。
- (4)心ない人が、自分が退屈^{ひま}があるので訪ねてきて長居するのはやりきれない。
- (5)しかしこういう人を白い眼で見るのは人情を知らぬものである。
- (6)礼を失ってはならない。

P245 ~ 253

<コメント>

貝原益軒の人生論、大人の教科書、とりわけ退職後の過ごし方としての「第一級のテキストブック」。貝原先生、80歳にして執筆した人生の後輩に対するアドバイス集。心安らかに人生を全うしたい人は、是非、一語一句大切に大切にお読みください。現代語訳は京都の町医者、松田道雄先生。名訳です。

2021年10月23日(土) 林明夫

—清福の楽しみ—

1. 清福の楽しみ

- (1) 清福ということがある。楽しみを好む人はかならずこれを知っていないといけない。
- (2) これは識者の楽しむところで、俗人は知らない。
- (3) だからわが身に清福を得て大きい幸福があるのに、これを知って楽しんでいる人はまれである。
- (4) たとえば宝の山に入っても、宝が何であるかを知らないと手ぶらで帰るようなものだ。
- (5) 清福は富貴が驕慢に楽しむ^{さいわい}福ではない。
- (6) 貧賤で世にみとめられなくても、その身が気楽で、静かで、心に憂いがなければ、これを清福という。
- (7) 余韻があってしずかに書を読み古の道を楽しむのは、清福の大きな楽しみである。
- (8) またその心が風雅で、古書を読み、詩を吟じ、月花を愛し、山水を好み、四季のうつりかわるおりおりの美景と、草木のかわるがわるさかえて美しいのを見て楽しみ、貧しいが飢えと寒さの心配がなく、粗食でも口になれてしまえば、その味があり、しつこい美味をうらやまず、淡泊なのはかえって養生によろしい。
- (9) 布の着物、紙の寝具でも、多少寒を防げれば、それでよろしい。^{むぐら} ^お 葎の生い繁った荒屋に起きふししても、雨風の憂いはなかろう。
- (10) もし幸いに、書を多くたくわえて書架にならべていけば、貧とはいえぬ。
- (11) これは真の宝であるから、つづら一ぱいの金にまさっている。
- (12) また良友があって道を論じ、いっしょに月花を賞して楽しみ、風光の地にあそんで、奇景を愛する。
- (13) これはみな清福を得たのである。
- (14) 何の縁あってか、こういう福をうけるのは、富貴の驕楽にまさって大いなる幸福である。

2. 読書と良友

- (1) 清福は余暇があって、身は気楽で、貧賤でも心配のないのをいう。書を読んで古の道に不確かなところがない。
- (2) また山水月花の楽しみがある。
- (3) これは財産利益の^{ふじょう}富饒な福にまさっている。
- (4) 静かな室に安坐して、書を読み、道を楽しんだり、良友と対坐して道を論じたり、ともに風月を賞したりするのは清福のすぐれた楽しみである。

3. 天二物をあたえず

- (1) およそ生きているもので、静かで余暇があるというのはまれである。
- (2) 富貴の人は昔からどの時代にも多いが、心が気楽で憂苦がなく、身に余暇があってつねに楽しむ人はめったにいない。
- (3) それだから、清福の楽しみは富貴よりもはるかにまさっていることを知るべきである。
- (4) 愚かな人は清福を得ても知らないで楽しまない。
- (5) また清福を知っていても、身に清福がなかったらこの楽しみがない。
- (6) この清福を得る人が世に少ないのは、天が惜しみ給うところであるから、もっとも得がたいという。

- (7)もしこの清福の楽しみを知って、清福を得たら世にめったにない幸福である。
- (8)天の物をつくるのに、二つとも完全であることはない。
- (9)花のよいのは実がよくないようなものである。
- (10)すでに清福を得た人は、さらに富貴を願ってはならぬ。二つとも得ようとするのは欲が深く天命にそむいている。
- (11)清福を得てもなおほかのことを願って、富貴をうらやんで、みずから足ることを知らぬのは、分を知らないで楽しみを忘れるのである。愚かなことだ。

4. 旅行の楽しみ

- (1)旅行して他郷にあそび、名勝の地や、山水に美しい佳境にのぞむと、良心を感じおこして、けちくさい心を洗いすすぐ助けになる。
- (2)これもわが徳すすめ、知をひろめる手段であろう。
- (3)また言うに言われぬ異境に行って、見なれぬ山川のありさまを見て目をたのしませ、その里人であってそこの風土をたずね、あるいは奥まった山のふところに、岩をふんでたずね入ると、もともと山水を好み、青山をしばしば夢に見るような人は、心をうばわれて帰るのを忘れる。
- (4)あるいは海辺や山が遠くにみえる限界のひろい眺めは、万戸の領地をもつ王侯の富にもまさっている。
- (5)またその里にできた珍しい名産を見て、その味をこころみるのもめずらしく、心をなぐさめるものである。すべて景勝の地にあそんで見聞きしたことは、その時だけ耳目を喜ばせるのではない。何年もたってその見聞きしたありさまが、老後までおりおりに思い出されて、あたかもその時見聞きしたと同じ思いになって楽しめる。これだから世に結構なことを思い出というのももっともなことである。

5. 忍の理

- (1)忍はしのぶともこらえとも読む。
- (2)俗にいう堪忍かんにんすることである。
- (3)忍ぶべきことは多い。
- (4)といっても、およそ怒りと欲との二つを出ない。
- (5)わが身の好む酒食・音曲おんぎょく・女色・財利などの私欲をこらえて、ほしいままにしないのと、身の粗末で豊かでないのをこらえて、貧にあまんじ、苦しめないのは欲を忍ぶのである。
- (6)人がわれに無情で無礼なのを、凡人はこんなものだと思いこらえて、怒りうらまぬのは、怒りを忍ぶのである。
- (7)およそ怒りと欲を忍べば、心は平らかで、気は和らぎ、身は気楽で、人の妨げにならず、恥がなく、苦しみがなく、のちの憂いがなく、禍がない。
- (8)忍の一字から万の善が出てくる。ゆえに古い言葉に「忍は是れ衆妙(天地万物の微妙な道理)の門」というのである。
- (9)忍の理は楽しみを得るのに、大いに役立つ。

6. 酒は天の美禄

- (1)酒は天の美禄である。少しく飲めば心が大きくなり、憂いを消し、興をおこし、元気を補い、血気をめぐらし、人と飲びを合わせ、楽しみを助けて、その益は多い。
- (2)もし多く飲んで酩酊めいていすれば、人の見る目も見ぐるしく、口数が多くむやみに語り、姿も常と

かわって慎みを失い、心もあれて狂人のようになる。

- (3) 古人がこれを狂薬といったのももっともである。そのうえ病気になってなおりにくく、大きな禍になる。
- (4) 若い時から大酒を戒めないで習慣になってしまうのも残念である。それだから古い言葉に「酒は微酔に飲み、花は半開に見る」というのである。
- (5) 酒を飲むならほろ酔いを限度とし、楽しみを失わないようにする。
- (6) 飲みたいだけ飲んで苦しみを求めてはならぬ。天の美禄として、楽しみを生ずる結構なものを、かえって狂薬とし、大禍をなして憂いを生ずるのは、いやしむべきことである。

7. 気を養う

- (1) 昔の俗曲・民謡の類で、節がおもしろいのを、元気に一句々々うたって満足するのも、心のめいるのを開いて気を養う助けとなろう。
- (2) 古人は、歌を歌い舞を舞って、その血気を養った。これは心を楽しませ、気を養う術であろう。

8. 勇者と和順

- (1) 武士は勇を専一にしなければならぬ。
- (2) 勇を外にあらわさず内にふくむのである。
- (3) 常の時は和楽にして、人に対するに温厚でなければならぬ。
- (4) 「勇天下におおえども、これを守るに怯きようを以てす」と「孔子家語こうしけご」にいりようにするがよい。
- (5) 怯とは臆病のことである。
- (6) また「大勇は怯つたなきが如し」ともいう。これは外に勇をあらわさないことである。
- (7) 和順で礼があると人はあなどらない。
- (8) 人にあなどられまいと言語・氣象をあらあらしくしてはならぬ。これは和楽を失ったのである。
- (9) 真の勇者は顔かたちがあらあらしくない。
- (10) かえって柔和である。
- (11) 張良ちやうりやう (前漢創業の功臣)は、その形が婦人のようで、その氣象が従容として静かであったのは真の大勇である。
- (12) 欲をよくこらえ、義を見てはかならず行ない、節義をかたく守る。
- (13) これが真の勇である。真の勇者はつねに和楽である。

<コメント>

貝原益軒 80 歳の作品。人生の楽しみとは何か、その人生の楽しみを得るためにはどうしたらよいかを、80 年間の人生経験に基づいてわかりやすく述べた、大人のための道徳の教科書。300 年たった今でもほぼその通りあてはまる「人生の教科書」。

2021 年 10 月 22 日(金) 林明夫

1. 天地の理法

- (1)一年のうち天地の理法はつねにめぐり、四時に行なわれて、万古以来やむことがない。
- (2)その間、霞かすみのたつのから雪のつもるまで、その景色はおりおりにことなり、また朝夕の景色も日々のことなり、変化してきわまらぬ眺めである。
- (3)天にあって形象かたちをなすのは、日月の輝き、風雨のうるおい、霜雪そうせつのきよらかさ、雲烟のたなびき、すべて天の文様である。
- (4)地にあって形象をつくるのは、山のそばだち、河の流れ、入江のふかさ、海のひろさ、鳥のさえずり、獣の動き、草木の繁茂、すべて地の文様である。
- (5)このように天地のうちに四時が行なわれ、百物の生成のさま、目のまえに満ち満ちて、人の目をよろこばせ、心を感じしめること、これ大いなる楽しみである。
- (6)これを楽しむ人は、眼力をもって境界とし、四時をもってよき時節とする。
- (7)その楽しみは、人間最高の官位にも、万戸を領する王侯の富にもくらべられない。
- (8)よく心をとどめて天地の形象を愛する人は、その楽しみにつきるところを知らぬであろう。

2. 春はまず

- (1)それではここに、天地のうちに満ちた四時の景色のつきるところのない楽しみをかぞえてみよう。
- (2)春はまず一夜のうちにあらたまつた新年の朝の空の光、思いなしか旧年とかわってのどかである。
- (3)正月は事のはじめとって、貧しい家にも春盤しゅんぱん（立春に御馳走をならべる）などいうものをもうける。
- (4)また、かわらけを出して御神酒おみきをすすめ、最初の勤めに父母にお祝いをいい、つぎにみずから祝い、お客にも御馳走する様子など、つねにかわってめずらしいのもよい。
- (5)時は今、四季のはじめ空の景色もようやくかわり、東風がゆるやかに吹いて氷がとけ、遠い山辺に霞のたなびいていたのがうすれ、さまざまに物がさやかに見えて、冬の空とかわった装いは、まず春のきた明らかなしるしである。
- (6)垣根ごしに見えがくれする残雪のところどころまだらなのにも、去年の冬の名残りが惜しまれる。

3. 待ちわびた梅の香は

- (1)待ちわびた梅の香は百花にさきだつて春の知らせを得てよろこばしい。
- (2)谷を出て高い梢こずえにうつる鶯うぐいすの、春をむかえた声はまだわかい。
- (3)初春の初音はつねに今日あったのが耳に残って恋しいが、花でなくては、まことには解し得まい。
- (4)花を愛し鳥をうらやむのは、これまず春のたまものである。
- (5)これをはじめとして、なおこれからさきはるかに栄えゆく春のゆたかな恵みがたのもしい。
- (6)千年を経たみどりの松も、ひとしお色をまして、つねに見なれていたのに、めずらしく感じられる。
- (7)韓文公かんぶんこう（韓愈、唐の文章家）が「最も是れ一年に春は好き処こ」といったのは、早春の景色が一年のうちでことにめずらしくすぐれたためであろう。

- (8)二月のころから、万物に冬の風情ふぜいが消え、雲の色はうららかに気色よもだち、四方の山も霞をこめた装い、ことに夜あけの景色はたとえようもなくおもむきがある。
- (9)古人が「春は曙あけぼの」といったのももっともである。
- (10)日の光は分けへだてをしないから、とるにたらぬ垣根のうちにも冬にかわって輝きはじめ、草木は萌え出もてみな色を生じ、花をまつ様子にもなごやかな気配があつてうれしい。
- (11)日向もようやくのどかになってゆけば、人の動きも去年より余暇を生じて落ち着き、日は長く少年の如く、心は静かに豊かである。
- (12)海面は陽光輝き、うしろの山もうららかに霞みわたつてはらかな遠景である。
- (13)鐘は夕刻を告げて日はすでに没したが、残光の久しくつづくのは、日が長くなったしるしであらう。
- (14)このころは陽気たちのぼる空に、まことに童たちは紙鳶しえん(たこ)を作り長い糸をつけ、風に任せてはなてば高く舞いあがる。
- (15)それが雲の上まではるかにたなびきたわむれるのを、老いも幼きも空を仰いで見るのも興が深い。
- (16)野にはまた陽烟というものが霞のように地から立ちのぼっている。
- (17)このかげろうというものを、莊周そうしゅう(莊子)は野馬やばという。
- (18)杜甫の詩に「落花遊糸(かげろう)白日静かなり」というのもこれである。
- (19)これは常にはないものであるが、春らしくていい。
- (20)また垣根の草がはやく萌え出るのを見るにつけても、春の気は下から上っていく。
- (21)陰気・陽気の交替のけじめがたいへんはっきりしている。

4. 花の季節

- (1)花もだんだんと咲きつづいて、梅花の散ったあと新たに咲くのは、わが国の花ではない中国の桃の花であらう。
- (2)桃の花の紅の色は、たなびく雲のわきおこる心地である。
- (3)李すももの花の白いのは、消えかける雪が梢に残っているのかと見えて美しい。
- (4)桜の咲きはじめてのこそ、花に心はないけれども人の心を動かし、いうにいわれぬ眺めである。
- (5)これはわが日本で四季の花の多いなかでも、第一の見ものであるから、梅が散つてあとのこの時節では、ほかの花はすべて圧倒される。
- (6)しかし、なん日も待たせ待たせてようやく咲いたのが、見飽きるひまもなく散るのは、またうらめしい。
- (7)「よしさらば散るまでも見じ山桜花のさかりを面かげにして」といにしえの人の詠んだのも、のちの思い出にしようというのだろう、情趣の深いものがある。
- (8)この頃から春雨がしばしば降るから、わが家の庭の桜はどうだろうと心もとない。
- (9)柳みどりに花くれないに春の色をえがき出したのは、美しい眺めである。
- (10)春がようやく深くなると、風はなごやかに日は暖かく、百草は香りを争い、群花は艶を競う時搏で、いたるところこれすべて春である。
- (11)このような景色にあつて人の心も浮き立ち、気のあつた友人とつれだつて、春をたずねて憧れあるき、終日花を眺めて暮らすのは、目を楽しませ、心を快くするわざである。
- (12)世の中のすぐれて楽しいものの一つであらう。
- (13)心の楽しみを知らぬ人は、ならずものの少年が、わずかの余暇にあわてて行樂するのに似

ていると思うべきである。

- (14)「芳草雨後に秀で、好花風裏にかぐわ香し」というのもこの頃である。
- (15)杜甫の詩に「鶯の歌あたたかにして正にしげし」という。
- (16)陳希夷（陳搏、宋初の道士）が「野花啼鳥一般（一樣）の春」と詠じたのもみなこの時である。
- (17)すこし酒に酔って花の夕映えを見るのも、ことに色が美しい心地がする。
- (18)花にむかって坐り、月を酔って見るの二つをかねた楽しみは、「春宵一刻直千金、花に清香あり、月に陰あり」という詩を思い出させる。
- (19)また「花を惜しんで春起くること早く、月を愛でて夜眠ること遅し」ともいった。古人はこれほど月花を愛したのに、今人はせつかくの夜の月と花とにそむいて、むなしく寝てしまうのは惜しいことだ。
- (20)また夜の間の風に花がどうなっただろうかと思ひもせず朝起きるのがおそいのは、花を惜しまぬ人である。
- (21)この頃は夕ぐれに遠い山辺に煙のたっているのも目につく景物である。
- (22)だから「春は焼痕（山焼きのあと）に入って青し」といい、また「野火は焼きてつ尽きず、春風の吹きて後生ず」というのも、焼け野の草をうたったのである。古詩に「地塘（池のつつみ）春草を生ず」とあるのは、この頃の目の景色をただありのままにいったのだろう。
- (23)三月も半ばになると、八重山吹が風ひるがえり、井手（京都の南の山吹の名所）のあたりを見る心地がして、にぎわしいから、つい目がはなせず眺めていることが多い。
- (24)春の花の多いなかに、椿つばきの花はほかの花とちがって盛りが長い。
- (25)ことさらに並べて植えた列々椿は、つくづくと見ていてもあきない。
- (26)橋のたもとの薔薇ばらも夏を待つ様子である。
- (27)すべて春の花は、あるいは先立ち、あるいはおくれ、幾度もはじめにかえて、競いあい、おそく早く咲きつづけ、とび酴醾（蔓生の灌木、花は初夏に咲く）にいたって花が終りになるのは名残り惜しい。
- (28)春の花はどれも、咲きだした色のそれぞれに目を驚かされるが、気ぜわしく早く散ってしまうのはうらめしい。
- (29)九十の春の光は長いが、何くれとまぎらわしく、風雨もまた多かったから、なすことなくはななく過ぎて、とめようもない春の終りの今日の夕暮れにさえなった。
- (30)花の静かに落ちるたそがれのひと時は、春の名残りがことさらに惜しい。
- (31)蘇子瞻（蘇軾、宋の詩人）が「青春は一夢に還る」といったのはもっともだ。
- (32)仲間のことも、うき世のちりも、わが心のきたなさも、花を見ている間忘れていたのに、今からあとはどうしたものか。
- (33)こういうおりにふれると、ことさら時の早く過ぎて失いやすいことが思い知らされる。
- (34)年老いたから、あと何年春の花にあうだろうかと思うと、春の惜しさはさらに深い。
- (35)せめて樽酒をあおって、残りの春を楽しんでこの憂いを忘れよう。
- (36)すべて春の景色は一年のうちでもっともえんれい艶麗である。
- (37)その美しいさまは、いづくししようもない。
- (38)こういうつたない言葉で、その一端をあらわし得たと思うのも笑止であろう。
- (39)雨風に花は散ってあともなく、むなしく枝だけが形見となって見えるが、なお春色は空に残っておもかげの去らぬのはおもむきが深い。
- (40)藤はまた春にひとり立ちおくれ、夏にさきがけて、そばにならぶ花がないからか、それだ

けに興のある様子、春に別れたもの思いもすこし忘れられる気持がする。

5. 夏の装いがめずらしく

- (1) 惜しんでもとまってくれぬ春が去ってしまうと、呼ばぬのにやってきた夏の装いがめずらしく、今めかしくあらたまった頃、空虚になった地上の気持よいところに、青葉の梢さわやかに、万事春とかわって、また世界がちがってくるありさまなのも、たいへんよろしい。
- (2) 緑の木陰に昼の静けさができるが、さびしくはない。
- (3) しずかに話しあえる友人があれば、春の花盛りにまさって楽しい。
- (4) 時を得て鳴くほととぎすに初音が愛らしく、鶯のなく声のすでに老いたのにかわる心地がする。
- (5) 中国の人はほととぎすの声をきくのをにくんだが、わが日本では昔からこれをあわれんで歌にも多く詠んだ。
- (6) 夜もすがら空にとどろくように鳴きわたるが、聞く人はああやかましいとは思わない。
- (7) あまり鳴かぬ所では、もう一声でも聞きたいと思い、また鳴いていく方の人も待っているだろうと思うと、過ぎていくのも、少しもうらめしくない。
- (8) 卯の花の雪かと思うように垣根に咲くのも、この月の名（四月を卯月うづきという）をひとり占めして、美をもっぱらにするといえよう。
- (9) およそ四月の景色は清くなごやかで、空は晴れ、雨は久しく降らず、余寒はなくなり、日は一層ながく、余暇が多いので、外に出て遊ぶのによい。
- (10) 朝早く起きて庭の様子を見るのにも、風は暖かく気持がいいので、日々見てまわるところが多くなる。
- (11) 草も木もみな緑の色をあらわし、おのおのその趣をなしているのは、天地の恵みをそのままにうけたのだ。
- (12) 動物よりも成長がすなおで、不思議がなく親しみやすい。
- (13) 韓偓（唐の詩人）の詩に「四時最も好きは是れ三月」といったのは、まことにそのとおりである。
- (14) しかし高齢になると、暑さ寒さがいやなので一年のうちでは四月がいちばんいい。
- (15) そのためだろう、明の李夢陽（明の詩人）が「四時の景初夏に如くはなし」といったのも、先輩とはまたかわってたいへんうまいあらわしたものだ。
- (16) 四月はこんなに空が晴れているが、五月になると大空の景色がさきごろに引きかえ、梅雨が久しくつづき、朝どきは雷がなって恐ろしく、雨の降らぬ時も曇って、夜は何も見えぬ闇である。庭の様子を見るひまも少なく、いつも閉じこもって日数がたつのもうとうしい。

6. 夏もようやく深く

- (1) 夏もようやく深くなると、木に繁らない木はなく、草にのびない草はなく、日々にのびるように見えて、どこまでも緑の色の深い夏木立は、花にもおおかた劣らない。春の花は所々に咲いてまばらであるが、夏は山も里も木のある所、草のある所、日に輝いてみな緑であるから、春とちがった眺めである。
- (2) いろいろの草を植え集めて夏の情感はさらに深い。
- (3) 前栽の草木は雨をうけて、その梢をあらわし、時を得たように存分に繁茂するのもうれしく見える。
- (4) 昔を思い出させる 橘たちばなの花の香りのする夜は、追い風も親しく感じられる。

- (5) 早苗さなえを植える頃は、田家でんかは待っていた雨が降って、いそがしくにぎわしい。
- (6) この頃庭に引き入れた小川のそばにとぶほたる螢が音もしないで集まるのを見ると、鳴く虫よりいっそう愛らしい。
- (7) 夏山の景色では、青々として高い連山が雲のそとにそびえ立つのを、心ゆくまで眺めるのは、すぐれて爽快そうかいである。
- (8) 白楽天が「眼をほしいままにして青山を見る」といったとおりである。

7. 七月の頃になると

- (1) 七月の頃になると、縁先の風も好ましく、わらの円座を敷いているのも心地よい。
- (2) 池の中央の蓮の葉の、濁りにそまず、花もないのに夕風に香ってくるのさえ、ほかの草にすぐれている。
- (3) ことに花卉が微笑するかのよう開いた時は、所せまいほど香りが満ちて、世にくらべるものなく清らかである。
- (4) 涼を追って木陰にやすみ、木々の下風のなつかしいところで、泉の水を手ですくって飲むのは、夏を忘れる気持である。
- (5) すみわたる夜半の月光を清い水にうつしてみるのはいままでもないが、庭に引き入れた小川の音など聞いているのも満ちたりた思いである。
- (6) 連日の暑さにたえがたい時、にわかに夕立がして、あとの名残りの涼しいのも気持がいい。
- (7) 清少納言せいしょうなごんは「夏は夜」といったが、夕方は蚊という虫が人をさすので、年としては、とくにたえがたいから、朝の明け方の風の涼しいのがさすがにしくて意にかなう。

8. 暮れにくい夏の日

- (1) 「志士は日の短きを惜しむ」と傳玄ふげん（晋の文章家）はいった。それだから「人は皆炎熱に苦しむ。
- (2) 我は夏日の長きを愛す」と柳公権りゅうこうけん（唐の学者・書家）がいったのももつともである。
- (3) 暮れにくい夏の日、学問を学び技芸に努める人のためには、まことに好ましい。
- (4) しかし炎暑の盛んな時は、国中が燃えさかる炉のなかにあるようで、何もしないでも汗がこぼれ落ちるほどで、身の力が弱ってたえがたいから、夏の過ぎていくのは、春秋のしまいや冬の終りに名残りを惜しむのとちがい、水無月みなづきばらい（六月晦日に神社で行なう神事）をする頃になると気持がいい。ただ年の半ばがもう過ぎてしまったことは惜しい。

9. 秋が来ると

- (1) 秋が来ると初風が涼しく吹いて、草木のそよぎ、秋の声がいたるところになびいて聞こえるのは、初春の風とちがって、心をいたませ、身にしみて秋の気の到来が感じられる。
- (2) こおろぎが階下に集まって鳴くのも、季節を知っているように聞こえる。
- (3) 阮籍げんせき（三国時代、魏の人。竹林の七賢の一人）が自分の気持をうたった詩に「開秋は涼氣を兆し、蟋蟀こおろぎは床帷しょうい（腰掛けにかけた布）に鳴く」といったのも、この頃の景色をいったのである。
- (4) 大暑がようやくしりぞき、新涼が来ると、まるで冷酷な役人が去って、昔からの友人が来てくれたようである。
- (5) この頃は人の気力も回復し、燈火も親しくなるから昔の本をひろげてみるのによく、すべての楽しみにまさって興がふかい。
- (6) 萩の上を吹く風、萩の下にむすぶ露、さまざまの虫の音、みな秋のあわれをもよおして、身

にしむこと限りがない。

- (7) 門のそとの田の稲の葉が朝露にしめり、夕べにおとずれる風にそよぐさま、とくに早稲・^{わ せ}晩稲があるいは先だち、あるいはおくれて穂を出すありさまは、みな感にたえぬ。
- (8) 仲秋の頃ともなれば、一年待ってようやく見られた名月は、およそ天地間にくらべるもののない唯一の見ものであるから、すべての美景もその下になろう。
- (9) この夕この景色にあうのは、この世の中のおもしろさもあわれさも尽くしてしまうようなものだ。
- (10) 毎年、一年のうち月ごとに、上弦の月から居待ちの月まで、空が晴れていれば毎夜心を楽しませ、目をよろこばせることは数かぎりない。
- (11) ことさら秋の三ヶ月は、おりおりの美しい光を、年ごとに心ゆくまで見られるのは、まことに幸福の多いこの世である。
- (12) およそ天の下の君は、四方八方をしろしめして、天地はみなその領し給う国のうちではあるが、いやしい私のようなものまで、天にただひとつかかる月を自分のものとして、好きなだけ仰ぎ見るのもありがたいことで、身にあまる幸いである。
- (13) 差別なしにいやしい町も同じように照らしているのはよろしい。
- (14) 年々に月と花とを飽くまで見られるのは、じつに思い出の多いこの世といえよう。
- (15) せつかくの夜の月だから、気心の知れた人といっしょに見たいのだが、そういう友人はめったにいないので、西行法師が「ひとりぞ月は見るべかりける」と詠んだのもよくわかる。
- (16) 中国の人も「秋月は俗士と見るべからず」といった。
- (17) 李白は「今人は古時の月を見ず」といったが、昔、世々の人が眺めたのもこの月であるから、古人の形見となっているのも、昔が思い出されてなつかしい。
- (18) 古今の人の世を去っていくのは、流れの去ってかえらないようなものである。
- (19) ただ月の光だけが昔も今もかわらないのは、この上なく貴重なことと思う。
- (20) 月が梧桐（あおぎり）の上にいたり、風が楊柳（かわやなぎとしだれやなぎ）のあたりを吹くのは、心を洗い興をもよおして、なんともいえぬ気持よい季節である。
- (21) 四季ともに思い出の多いこの世であるが、とりわけ秋の月は、見られないであろうのちの世の光まで思いやられる。
- (22) 秋も半ばをすぎると、大空に初雁^{はつかり}がつらなって鳴きわたるのも、また愛らしい。、花は春というが、秋もまた花は多い。
- (23) ことに野辺に生える秋草の、名も知らぬ花が、たくさん草むらに咲いて、錦^{にしき}をさらすように見えてくると、秋の野はいっそう愛らしい。
- (24) 秋の花がながく咲きつづけるのは、春の花が見るまもなく早く散るのよりいい。
- (25) およそ花のなかできわだっているのは、春は梅・桜・桃・海棠^{かいとう}などであるが、それらが木に咲く花であるのは、陽気は先に空にのぼるからであろうか。
- (26) 秋は萩・おみなえし・尾花^{おぼな}・葛花^{くずばな}・なでしこ・ふじばかま・あさがおの七種のほか、ききょう・りんどうなど草の花が多い。
- (27) 秋はまず陰気が下へくだるためではないだろうか。
- (28) なでしこは、春は草だけのように見えているが、夏から咲きはじめて秋の色をあらわしてくる。
- (29) 中国や日本のいろいろの花の咲く九月の頃は、秋の花もすぎ、紅葉にもまだ早いのに、菊は百花におくれて咲き、ひとり晩節をたもって、霜にほこるように節操の色をあらわし、すべての花と時がちがうばかりか、色・形・香ともことにすぐれてあでやかであるから、たとえこ

の時期に花が多くても、とりわけて愛されるにちがいない。

(30)それが秋の末に菊だけが盛りなのだから、時節にあって大いによろしい。

(31)元稹げんしん（唐の詩人）が菊を詠じて「これ花の中に偏ひとえに菊を愛するにあらず、この花開き尽くして更に花無し」といったのは、菊を愛する心がまだ足りない。

(32)この花は『万葉集』にのっていないなくて、『古今集』にはうたわれているから、奈良の時代までまだ中国からはいつて来なかったのである。

(33)いまさらむかしを思い出しても、不満で、残念である。

(34)屈原くつげん（戦国時代、楚の詩人）が『離騷りそう』で梅のことを書き忘れたのと同じようなものであろう。

(35)杜甫が海棠を詠じなかったのは、礼儀にかなっているから、それはそれでいい。菊は上品で世俗ばなれした花のためか、これを好む人は少ない。

(36)牡丹ぼたんは富貴な花なので、近ごろの世俗がますます熱心になるのは、もっともなことだ。

(37)欧陽子おうようし（欧陽修のこと。宋の文学者）が、「人の心はそのこのむところを以て知るべし」といったのは、まことに当然である。

10. 花の数

(1)およそ一年のうち、梅の咲きははじめから菊にうつるまで、いろいろの花の盛りにあってきて、なじんで見た花は数が知れない。

(2)この季節々々の楽しみも思い出が少なくない。

11. 秋は空が清く

(1)秋は陰気の生じるはじめなので、空が清くすみわたり、高くほがらかで、月日の光が明らかである。四方をかえりみると、茫々ぼうぼうとしてひろく、風は肌に涼しく吹き、その景色は人の心に深くしみいって感じられる。

(2)「春はただ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋ぞまされる」と詠んだのも、秋になってみるとなるほどと思われる。

12. 秋の日の妙なる

(1)陳眉公ちんびこう（陳繼儒、明の文人）が「世の人はみな秋月をめでて、秋の日の妙なるを知らず」といった。このことは世の人も気がつかなかったのだが、自分もそういわれてみると、いかにもそうだと思ひあたる。

(2)気をつけて秋の陽光が草木に輝く清楚な美しさを知るがいい。

(3)未ひつじの刻の後半（午後二時から三時）あたりから、その景色はますます美しく、ことに夕陽ゆうひが西にかたむいて山に入り、海に沈もうとするのは、世にたぐいない、えもいわれぬ眺めである。

(4)日と月とは大空にならぶ光であるから、万物にすぐれているのも当然である。

13. 秋はまた夕暮れの

(1)秋はまた夕暮れの景色が非常にいい。

(2)うす霧まがきの籬まがきに立ちのぼるよそおい、風の音、虫の音、どれも人の心にしみて春にもましてあわれが深い。

(3)秋は夕と誰でもいいたくなる。

- (4)夜が長いから暁の鐘は人をおどろかしやすく、ねざめがちである。
- (5)ことさら老いの眠りは早くさめて、いつも夜を残しているの、ねられないままに懐古の心がおこり、来し方行く末のことが思いつづけられる。年をとるとつねに昔のことばかりがなつかしい。

14. 春か秋か

- (1)中国の人は一年のうちでとくに春を愛し、文章にも春を賞した言葉が多い。
- (2)わが国の人には昔から秋に心をひかれる。
- (3)どちらがよいか、昔のわが国の人には本にも多く書いている。
- (4)春秋の理は陰陽を異にするが、その景色はどちらもすぐれてよいから、この争いは賢人や哲人でもきめにくいだろう。
- (5)まして人の心はその顔つきのようにちがっているから、性分の好みで、春秋の優劣があるだろう。私のようなものの心は、時によって移っていくから、どちらがまさっているときめられない。
- (6)花と紅葉の散っているのも、どっちのほうがか惜しいとはいえない。

15. 九月の末になると

- (1)九月の末になると、秋の花はみなおとろえ、虫の音も鳴き枯れて、紅葉がようやく色づいてくるので、秋の暮れゆく思いもまた深い。
- (2)秋はもう今日ばかりだと眺めるのも、いたく名残り惜しい。
- (3)春の終りにくればると、草も木もようやく枯れはてて、これからどんな景色になろうかと思いやられてさびしい。

16. 冬も近づいて

- (1)冬も近づいて、今日から火をいれた火鉢もだんだんと離れにくくなる。
- (2)露と霜とがおきかわり、木々の梢の紅葉も色こく、まばらに萱かやの生えた原も冬枯れの景色となって様相のかわるのも、秋とちがった眺めである。
- (3)十月の時雨しぐれもすぎて、日があたたかだと、ちょっと春になったような心地がする。
- (4)この月を小春といったのももってもである。
- (5)しかし十一日、二十一日と一がつく日がかさなっていくと、風はいよいよはげしく、木の葉が降り、山があらわに見え、松だけが峰に残るのもさびしい。
- (6)春・夏・秋のあてやかな景色、装っていた様子が、皆この時にいたって尽きるの、山の空もこんなにかわったかと驚かれる。
- (7)数日來の雪のつもった壮大な朝は、山も里もひたすら銀世界になって、世界がかわったようである。
- (8)冬ごもりしていた梢の枯れたのがふたたび花が咲いたようである。
- (9)ことさら冬の夜のすみきった月に、雪を反映した空は、見る人もなく、ひとり身にしみてあわれも深い。
- (10)空がはれたあとは、友を待つ様子で、ところどころ消えのこったまだら雪も心にくい。こういう時、何もすることがなく、ふところ手をしていらだっている人はわびしく見える。
- (11)埋み火にむかって、書をひもどくことを日課にしている人は、楽しみが深いことだろう。
- (12)万事、年に先だって早く計画をたてるがよい。

(13)若い時につとめて書を読み習っておけば、こういう時もわびしくないだろう。

17. 冬の末にもなると

- (1)冬の末にもなると、今年の日数も残り少なく、^{こよみ}暦の軸も見えてきて、春はすぐ隣りまでできている。
- (2)年の終るのは惜しむべく、歳のかさなるのはなげかわしいが、新しい年をむかえるのは、めでたいことであるから、よろこぶべきだろう。
- (3)この頃、世の中の人は何くれといそがしそうに落ち着かず、大声をあげて走りまわっているのが多いのを、ひとり静かに見る人は楽しかろう。
- (4)一年がはかない夢の心地で過ぎたのだから、あとをかえりみて、切に名残りを惜しむがよい。
- (5)老いの身は、月日もますますたちやすい。
- (6)何ということもせずまたひとつ歳をとったのがうらめしい。
- (7)しかし人のこの世に生きるのは、思いがけない異変の多いことなのに、一年のうちに不幸なくすごせた人は、また楽しいではないか。
- (8)春秋の暮れていくのさえ名残り惜しいのに、まして一年の終りの今日の夕暮になったのは、実に名残り惜しい。
- (9)中国の人は「歳を守る」といってこの夜は一晩中寝なかったという。
- (10)これは古いものを送って新しいものを迎える心であろう。
- (11)送り迎えについて、喜びと悲しみとがひとかたでなく、四季のうつりかわりに、感をおこす人は感情がゆたかなのである。
- (12)あわれを感じずる人はこれによって悲しみ、道理に通じた人はこれによって楽しむのである。
- (13)景色は同じだが、ただ見る人により^{えん}艶にも^{すご}凄くも思われるのだろう。

18. 無為の季節に見えるが

- (1)一年を全体として考えると、春は陽気はじめてのぼり万物が生じる。
- (2)空の景色ものどかで、人の心もうららかでにぎわう。
- (3)夏は陽気はことごとくのぼり、宇宙にあまねく満ち、天地が交わって草木がしげり万物が成長する。
- (4)秋は陽気はじめてくだり、陰気はのぼり、万物はおさまり、景色がきれいで人の心にしみて感じるものが深い。春に対して表裏をなすものである。
- (5)冬は陽気はことごとくくだり、陰気もっぱらで万物はかくれる。夏に対して表裏となっている。
- (6)およそ一年がめぐって、冬にいたって天地が交わらず、閉じふさがって、物はかくれてしまう。
- (7)春は生じ、夏は長じ、秋はおさめるというような作業が冬にはなく、月日はうつろっていく。
- (8)冬は美景もなく、四季のうちで無為の季節に見えるが、じつは春・夏・秋の美景を生んだ作業が、この時に停止して、一年の大功を終えて、残った元気をふかく貯蔵して来たるべき春のもととしているのだ。
- (9)その理をふくんでいるのがこの季節である。
- (10)だから冬、気が一すじに閉じかくれて無為に見えるのは、一年の成功の終りであるだけでなく、また来る年の発生の恵みをふくんでいるのだから、始めになっているともいえよう。
- (11)人が毎晩ねむって、気がしずまるのは一日の疲れをいたわりやすめ、明日の労働の力のも

とになっている。

(12)もし夜によくねむらないと、今日の疲れをやすめられず、明日のはたらきに力が出ないようなものである。

(13)冬にあっては人も天の時にしたがって、静かに精神を養うがよい。

19. 天道の誠

すべて一年のうち、月日がめぐり、四季がうつり、百物が生じるのが、毎年ちがわず、万古から来世までかわらないのは、天道の誠のなし給うことで尊ばねばならぬ。静かな生活をしてこれを感じる人は、その楽しみはふかかろう。もしこの理を知っている人は、道を知っている人であろう。

20. 人の一生

(1)時節は目に見えて早くたつというのでもないが、日数がかさなっていくと、一年の過ぎるのはすぐだ。

(2)人の一生を経るのも、年がだんだんとかさなると、老死にいたるはほど遠くない。

(3)まして人の命は、いたってあやうく、朝に夕を知るよしもない。

(4)少壮の人が老大の人に先だつことも多いから、あてにならない。

(5)久しくないうき世に、時のうつっていくことが早いのだから、あたら時日をむなしく過ごしてはならぬ。

P257 ~ 268

<コメント>

貝原益軒の「幻の名著」で、京都の町医者松田道雄先生の名現代語訳の「楽訓」の「巻中」第2章。移り行く四季の自然を楽しみながら、一人ひとりが人生を大切に生きるにはどうしたらよいかを、この「楽訓」の第2章は教えてくれる。貝原益軒との「時空を超えた対話」を、松田道雄先生の名訳でじっくりとお楽しみください。

2021年10月26日(月) 林明夫

1. 読書の楽しみ

- (1) およそ読書の楽しみとは、色を好まなくてもよろこび深く、山林に入らなくても心のどかに、富貴でなくても心ゆたかになることである。
- (2) 人間の楽しみでこれにかわるものはない。天地・陰陽をもって道の法とし、古今天下をもって心を遊ばせる世界として、そのおもしろさは至って大、かぎりなくひろい。
- (3) 一日書を読んでいる楽しみは最高である。
- (4) 聖賢の書を読んで、その心を得て楽しむのは楽しみ^{じんむ}の極致である。
- (5) そのつぎに昔のことを書いた歴史には、わが国では神武天皇より今年まで二三七〇年、中国では黄帝より今まで四四〇〇年の間のことがのっている。
- (6) だから中国と日本の歴史を見ると、遠いいにしえのあとが目のあたりに明らかに見えて、自分がその当時に生きていた心地がし、数千年の長生きをしたようだ。
- (7) この楽しみもまた大きい。目前のことだけを見て、昔の文章を知らないのは、ひどくかたよったことである。
- (8) 「人古今に通ぜざるは、馬牛にして襟裾^{きんきよ}（着物を着ること）す」と韓退之^{かんたいし}（韓愈、唐の文章家）もいっている。
- (9) 古い書を見ず、いにしえの道知らない人は万事理に暗く、いろいろのことを知らない。
- (10) まだ夢がさめないもののように迷って一生を過ごす。これは大きな不幸である。
- (11) およそ古今の書に通じて、理をきわめ、事を知っていると、見ること聞くこと万物の理に疑いがなく心のうちは大いに楽しい。
- (12) いにしえの書を知らないと、中国のことも日本のことも、古今天地のうちに満ち満ちている理も事もみなわからないといえよう。

2. 才学の人^は貧しい

- (1) 私などが経書や史書にかかわりをもつようになったのは、縁が深かったのであろうか。
- (2) 書にむかうと、いつとなく、このうえなく楽しく思われるのは、天から幸福を恵みくださったのである。
- (3) およそ天がものをつくることで、二つとも完全というのではない。
- (4) あちらもこちらも足りているのはまれである。
- (5) だから、こちらを得ればむこうを失う。
- (6) たとえば、花が美しいと実がよくないし、実がよいと花が美しくないようなものだ。
- (7) 千の花弁のある花には実がならない。
- (8) だから、才学のある人は多くは貧しい。
- (9) 才学があつてまた富貴なら、二つとも足りた幸いである。
- (10) これは得がたいのが理であるから、こういう人は世にめったにいないだろう。
- (11) 才学のある人が富んで貴く、幸いがならぶというのは、天が惜しまれるところだから、むずかしいことだ。
- (12) また天がこういう人を貧賤にして苦しめ給うのは、その人によってその徳を玉にしようとされているのだという理もあるだろう。
- (13) 才学という幸いがあつたら、貧賤で運が向いてこないことを悲しんではいけない。

(14)私などが、こういう愚かな心で、もし富貴でさかんにおごり、怠るのが習慣になったら、
学問をきらい、道に志がなく、楽しみがなかつたらう。

(15)だから、みずから貧にあまんじて、富貴をうらやんではならぬ。

3. 六つの助け

(1)書を読み字をうつすのに、明るい窓、清潔な机、筆硯・紙・墨の質のいいのを得て使えるのも人生の一つの幸いである。

(2)この楽しみを得るものは少ないと蘇子美（蘇舜欽、宋の詩人）がいったのも、書生には貧しい人が多いから、そういったのだろう。

(3)また貧しい人には灯がない。

(4)昔は雪で照らし、螢を集め、壁に穴をあけて書を読んだ人さえあるのに、今この六つの助けを得、また燈火にやや親しめる人は、幸いだと思って努めて書を読まないといけぬ。

(5)ある人のいったことに、聖賢の書を一人の師とし、筆・硯・紙・墨と机とを五人の友とし、あけくれこれに交わるのは益があつて楽しいと。

(6)また、燈火が暗い所を照らし、日光についで明るく本が読めるのはよい賜^{たまもの}である。

4. 書を読むのには

(1)書を読むのには時を惜しまないといけぬ。

(2)しかし、昼間は用が多くてはかがゆかぬ。

(3)夜は静かで、昔を考える楽しみが多い。

(4)この時を失っていたらずらに寝て過ごすのは惜しいことである。

5. 詩歌を読む

(1)四季につれて月花を鑑賞し、おりおりの景色を愛し、季節にかなった漢詩や和歌を声をあげて読み、心に楽しむのは、自分でつくる苦勞がなく、たやすくおもしろいことだ。

(2)中国の昔に、才のゆたかな人がいたが、客に季節にかなった古い詩をあれこれ引いて、その気持をのべた例が左氏の書（『春秋左氏伝』）に多くのっている。

(3)これは自分がつくるのより古めかしく理もまさり、人を感じさせることが深かつたからであろうか。

(4)いにしへのことは、手本とすべきである。

(5)私などがつたない言葉で、なまじか不用なことをいいだして、自分でいいと思つていても、詩歌を知っている人に見られたらはずかしいもので、顔之推のいった詭痴符（おろかな売文）のそしりをまぬがれにくいだろう。

(6)私なども才がつたなく、言葉をたくみにしようとする苦勞はわずらわしい。

(7)天才のある人がたやすくつくりだすのはおもしろいことだろう。

(8)しかし五字の句をうまくつくるために、一生の心をつかいへらすのは無益である。

6. 読書の益

(1)だいたいのは友を得ないとできない。ただ読書の一事は、友がなくてもひとりで楽しめる。

(2)一室にいながら天下四海のうちを見、天地万物の理を知る。

(3)数千年ののちにいながら、数千年の前を見る。

- (4)今の世にあって古人にむかいあう。
- (5)わが身は愚かなのに聖賢に交わる。
- (6)これみな読書の楽しみである。
- (7)およそ万事のすることのなかで、読書の益にまさるものはない。
- (8)それなのに世の人はこれを好まない。
- (9)その不幸ははなはだしい。
- (10)これを好む人は天下の至樂を得たといえよう。

P268 ~ 271

<コメント>

「楽訓」、清福の考えの下で人生を楽しみながら充実させるために「読書」ほど大切なものはない。読書の大切さをこれほどわかりやすく教えてくださる作品は余りありません。

2021年10月27日(水) 林明夫

1. 人の命

- (1) つくづく人の命を考えてみると、世間では長生きする人は少ない。
- (2) 幼時から四十までのあいだに早死にする人が多い。
- (3) 五十を不夭ふようという。
- (4) 不夭ふようというのは、若死わかしにではないという意味である。
- (5) 六十を下寿かじゆとし、七十を古稀こきといったのは、うまくいったものだ。
- (6) 若いときから親しくしていた人たちの面影が目の前に見えるが、多くは亡くなって年がたつのはまことに悲しい。
- (7) 花が春ごとに開くのを見ても、昔の人がかえって来ないのが残念だ。
- (8) これを考えると、自分が長生きしたのをよろこばねばならぬ。白髪がつぎからつぎと新しいのをなげいてはいけない。

2. 天命を楽しむ

- (1) 同じく人と生まれて富貴な人もあれば、貧賤な人もある。
- (2) その高下の位はまことに多い。
- (3) 富貴な人は贅沢をしないで人に恵むのを楽しみとすべきだ。
- (4) 乞食も生まれついた分があって、定まっていたことをさとして、分に安んじて楽しまないといけなない。
- (5) たとえば松は高さ数十尺に達するが、灌木かんぼくは低くて数寸しかない。
- (6) 同じ木であるのに、長短がそれぞれ違うのは、生まれつき定まっているからである。
- (7) きわめて貧しい人も、わが分の低いことに安んじて悲しんではならぬ。
- (8) おのれに生まれつかぬ富貴をうらやんではならぬ。
- (9) また世間では自分ほどでもない人が多い。自分より下の人を見て、わが分を楽しむがよい。上をうらやんではいけない。
- (10) また同じ人と生まれたのに長寿の人もあれば短命の人もある。
- (11) 長い短い、いろいろ種類が多くて、一々数えられない。
- (12) 富貴をきわめて万事思いどおりになる人も、ただ命の幸いだけは思うようにならない。
- (13) しかしこれも生まれついた天命できまっているのだから、短いといって悲しむべき理ではない。
- (14) この理に達し、天命を楽しんで身を終るがよい。
- (15) 死ぬ時に苦しみ悲しむなら、平生楽しんだとしても甲斐がない。終りを慎むがよい。
- (16) たとえば松は千年をたもつが、朝顔の花は一日だけである。
- (17) 長い短いそれぞれ異なり、生まれつき定まっている分であるから、短いものは長いものをうらやんではいけない。
- (18) めいめいその分に安んじるべきである。

3. 楽しみを知らぬ人

- (1) この世にあってこの世の楽しみを知らぬ人がある。
- (2) 富貴の人は、善を行ない人を助けて楽しむ道知らない。
- (3) 清福の人は清福の楽しみを知らない。

- (4) 病気がない時は病気がない楽しみを知らない。
- (5) ちょうど眠った人が夢を見ていて、それが夢だと知らないようなものである。

4. 太平の楽しさ

- (1) 栄啓期えいけいき（春秋時代の人）が、三楽とは、人と生まれたこと、男子（「男子・女子」とすべき。林）と生まれたこと、長生きしたことだといったのは、まことにそのとおりである。
- (2) 今の世の人はこのうえにもうひとつ大いに楽しむべきことがある。
- (3) これを知って各人が楽しまないといけない。
- (4) その楽しみとは何か。
- (5) 大君（徳川将軍）の御恵みによって、こういう太平の御代に生まれ、堯・舜の仁にあって、白髪になるまで戦争にあわなかった。
- (6) これは大きな楽しみではないか。
- (7) 邵康節しょうこうせつ（邵雍、北栄の学者）が世に感謝した言葉に「太平の世に生まれ、太平の世に老い、太平の世に死ぬる」といったのは、まことに大きな幸いである。
- (8) 今の世の人はみなそうである。
- (9) 乱世に生まれると、朝夕いくさを事とし、あるいは難をのがれて身のおき所もなく、あるいは盗賊に追われて山や海にのがれ、夜はひとり歩きができぬばかりか、昼間でも仲間がつれだっていけないと近いところでも往復できなかつたという。
- (10) 老いては身の死なないのを嫌うといったのは、昔の人が乱世の苦しみをいったのである。
- (11) こういう世に生まれた人の苦しみは、今から思いやるのも悲しい。
- (12) 昔から乱世は多く治世は少ない。
- (13) 今の人には昔、兵乱の世がながくつづいて不幸に悲しんだことを思いやって、わが大君の御恵みと今の世の太平の楽しみとを忘れてはならない。
- (14) 蓼たでの虫は蓼のからいことを知らない。
- (15) 今の世に生まれて今の世の楽しみを知っている人は少ない。
- (16) 昔のことを思いやって今の世を楽しまないといけない。

5. わが身の楽しさ

- (1) 私などは才もなく徳もなく、君を助け民を救う仕事もしていないのに、一步ぶの田もつくらず、一本の麻も植えないで、十分に食事をし、暖かい衣服を着、家にいて風雨におかされない。
- (2) これは大きな幸いである。
- (3) 農夫は日夜耕作に苦しんでいるのに、飢え凍えをまぬかれない。
- (4) あわれなことである。
- (5) これを思うとわが身は貧しくても悲しまずに楽しまねばならぬ。
- (6) 外を求め上を願うのは、おごって分を知らないのである。
- (7) 古い言葉に「上にくらぶればたらざれども、下にくらぶれば余りあり」とある。
- (8) これを忘れないで、わが身を楽しむべきだ。

6. 今の世の楽しさ

- (1) 万事そのはじめ、ものがまだそなわらなかつた時を思って今とくらべれば、苦しみがなく楽しみが多いだらう。
- (2) 上古の時は野に生活し、穴の中に住んでいた。

- (3) 食べる五穀もなく着る布もなかった。
- (4) いろいろの器がなく、ものを煮て食べることを知らなかった。
- (5) その苦しみを思いやってみるがいい。
- (6) 今の世の人は上古にくらべると、事ごとに備わっていて楽しいことだ。
- (7) また自分をはじめ貧賤だった時の苦しみを思って、今の時にくらべるがよい。
- (8) 戦国の時のつらかったのを思って、今の太平を楽しまないといけない。

7. 無限の楽しみ

- (1) 人ごとに生まれついた楽しみがあるが、学ばないと自分のものになっていながらわからない。
- (2) 多くの人の楽しみはみな外欲にある。
- (3) これをほしいままにすると、かえってわが身の禍がおこってくる。
- (4) 君子は学んで道を楽しみ、天命に安んじて貧を憂えない。
- (5) 楽しみを得ては書を読み、時節を感じ、風景になれ親しみ、月花をめで、詩歌を吟じ、草木を愛する。
- (6) このたくさんのかかわるがわる楽しめば、朝夕の楽しさは、きわまるところがないだろう。
- (7) 老いては心を安らかにし、身を楽にして貧賤に甘んずるのが、折りにかなくてよろしい。
- (8) こういう時に楽しまなかったら、月日は過ぎてとどまらない。
- (9) 惜しまねばならぬ。
- (10) これほど世には無限の楽しみがあるのを知らないで、何かにつけ悲しみ苦しんで過ごすのは、まことに不幸な人で、一生をむなしくするといえよう。

8. 善の楽しみ

- (1) 人の楽しみにみには善を行なうより楽しいものはない。
- (2) 漢の東平王（明帝の弟）が「善とうへいおうをするはいと楽し」といった。
- (3) そのとおりで。
- (4) 富貴の人はひろく人を愛し、諸人を救ってその楽しみはひろい。
- (5) 貧賤の人もその分に応じて人を救う志さえあれば、善行が多かるう。

9. 身やすく心おだやかに

- (1) 老いては、ますます人に気まますをいわず、物事を熟慮し、人をむやみにそしらず、怒らず、人のさまたげとならず、人がわれに無礼不仁なのをこらえて、うらまず怒らず、誰でもが君子なのではないから、こうもするだろうと思って、心にかけて苦しみ悲しまない。
- (2) 貧賤に甘んじ、身やすく心おだやかにして楽しむべきである。

10. 死期は遠くない

- (1) 天は長く、地は久しくてきわまりない。
- (2) 人は天地人と三つにならべられるが、命の短いことはまるで朝顔のようで、一生の過ぎやすいことは行きずりの人のようである。
- (3) 歳月は過ぎてとどまらず、時節は去って流れるがようである。
- (4) 李白の詩に「人生は大夢の如し、なんすれぞこれ生をくるしむ」とある。
- (5) およそ人の命は上寿は百歳、中寿は八十、下寿は六十という。
- (6) 下寿を保つ人もまた多くない。七十の人はまれである。

- (7) こういう短い年のうちを一日でも善を行なわず、楽しまずに、むだに暮らしてはならない。
- (8) 古歌に「世の中をかきひひてはてはてはいかにやいかにならんとすらん」といったのは、いまさら驚くことではないが、およそ人はみな、かりそめの定めのない身を持ちながら、死期の近いのを知らず、平生は間違っ**て**百年の計を立てている。
- (9) 老いの身はとくに残った生命のいくほどもなく死期の近くにあるのを忘れてはならぬ。

11. 不幸をくらべてみると

- (1) もしわが身に不幸があったら、古今の大きな不幸にあった人のそれに、自分の不幸をくらべてみると、自分の不幸はそれほどでもなくなり、うらみがなくなるだろう。
- (2) これはつたない計のように聞こえるだろうが、いにしへの賢者の教えである。
- (3) これをやってみると効果のあることが多い。
- (4) この計はすてがたい。

12. 天命に任せて

- (1) もし不幸にも悲しみが多かったら、わが身はもとから、こうなるように生まれたのだと思い、天命にまかせて死ぬまでは楽しみ、悲しまずに過ごしたい。
- (2) 達人は命を知って憂いがない。

13. 白髪を見て

- (1) 世には白髪を見ないで死ぬ人が多い。
- (2) 道を知らないで死ぬのはことに心残りが多い。
- (3) この世のありさまさえ知らずに、早死にするのは惜しい。
- (4) 私などは白髪を見ること久しい。
- (5) 幸いとせねばならぬ。
- (6) 東坡の詩に「人は白髪を見てうれしい、我は白髪を見てよろこぶ」とあるのもそのとおりだ。

14. 晩節を保つ

- (1) 年老いて、夕日の傾くように死ぬべき時が近づいてきたら、天命に安んじて悲しむべきでない理を知らないといけない。
- (2) 『易』の離の卦に「ほとぎをたたきてうたわずんば、ついに大^{だいてつ}蠹のなげきあらん」とある。
- (3) ほとぎとは人のそばに日用使う器である。
- (4) これをたたいてうたうとは、悲しみなく楽しんで日を送ることである。
- (5) 大蠹のなげきとは、夕日が天に傾くのをなげくのをいう。
- (6) 人が老いて死に近づいて、夕日の傾くようになるのは、これは当然の常の理であるから、なげいてはいけない。
- (7) なげくのは常の理を知らぬもので愚かである。
- (8) だから凶といったのである。
- (9) これはつねに楽しんで、老年になるのをなげいてはいけないというのである。
- (10) 人間が若年から老年になり死に近づくのは、四季のまわってくるようなもので、定まった常の理である。
- (11) それなのに老年をなげき死を苦しむのは、理に暗いというべきである。
- (12) 天命を知らぬからである。

- (13)『易』ではこれを戒めて、あのように入ったのである。
- (14)淵明えんめい（陶潜、六朝時代、晋の詩人）が「いささか化（死滅）に乗じて、尽くるにかえらん、彼の天命を楽しんで又何をかうたがわん」というのは、尽きるものは尽きるがよい、くよくよすることはないということである。
- (15)また「朝に仁義と生くれば夕に死すともまた何をか求めん」ともいった。
- (16)まことに達人の言葉である。
- (17)曹子建そうしけん（曹植、三国時代、魏の詩人）の詩にも「先民誰か死なざる、命を知りてまた何をか憂えん」とある。
- (18)まことにいにしえから死なない人はない。
- (19)天命を知らないで天運に任せようとしなかったら悲しみは多かろう。
- (20)平生のよい人も終りをよくしないのは、一生の勤めが空しくなったことで惜しむべきである。
- (21)晩節を保つことを心にかけないといけない。

15. 朝に道を聞けば

- (1)つくづく思えば、楽しみの多いこの世なのを、道を知らないために、われとわが心を苦しめ、天をうらみ、人をとがめる。
- (2)このように道を知らないために憂いの多い人は、途方にくれる心の闇が愚かなのだといえよう。
- (3)人の身は金石ではない。
- (4)生きているもので、最後には死なぬというものはない。
- (5)また二度と生まれてくる身でないから、この世にある間は楽しんで生きねばならぬ。
- (6)口悔しくも過ぎた昔のことは、どうにもしようがない。
- (7)いくばくもない生命であるから、今からのちは一日も月日を惜しんで、以前の間違いを悔いで、飛驒ひだの大工のうつ墨縄たくみではないが、ただ一すじに善を好み、道を楽しんで過ごすのが、この世に生きる甲斐であろう。
- (8)年老いては同じことをするくせがあるので、くりかえし自分にいいきかせ、心を戒め、また人にも楽しみをすすめる仲だちとしよう。
- (9)かえすがえすわれも人も、生まれついた楽しみを知らないで、身をむだにし、甲斐なく朽ちていくのは残念である。
- (10)もし朝に道を聞けば、人となった甲斐があるもので、夕に死んでもまた何をかうらもう。

宝永七年睦月
益軒貝原篇信書
時年八十有一
P271 ~ 276

<コメント>

「幻の名著」、貝原益軒、81歳の著、「楽訓」の最終章。このような文章に中学・高校生のころから慣れ親しみ、人生の大切なときに繰り返し読み返し自分自身のものにしておいたなら、このような人生・生き方にはならなかったと思う人が大半ではないかと思う。人生の一つ一つの時期を大切にしながら全うするのに、この「楽訓」ほどよいテキストはない。一日も早い復刊が望まれる。

2021年10月25日(日) 林明夫